

広田照幸 監修・北澤毅 編著  
リーディングス 日本の教育と社会 第9巻  
「非行・少年犯罪」

日本図書センター 2007年 A5判 380頁 ¥3675

稲葉浩一

政治や経済と違い、教育にまつわる諸問題は私たちにあって「語りやすい」トピックであるように思われる。1997年の神戸事件を代表とするセンセーショナルな「少年犯罪」は、その典型といえるだろう。周知のように、メディアはこぞってこれらの事件を取り上げ、有識者たちはその「問題性」や「原因」をいくつも声高らかに述べてきた。いわく現代社会の歪み、子どもたちの心の闇、地域社会の解体、家族の崩壊…。だがその主張は、お茶の間にいる私たち「一般人」が感じるものと、何がどう違っていたのだろうか。「語りやすさ」は「わかりやすさ」でもある。「非行」や「少年犯罪」をめぐる言葉はレディ・メイドなものとなり、それらは飽食された感すらあるのではないだろうか。そうであるからこそ、今ここで腰を据えた理解のあり方が広く提示されるべきだろう。

さて、本書の序論で編著者の北澤毅氏が整理してくれているように、「非行」と「少年犯罪」はいずれも「逸脱＝〈何かから逸れた〉行動・状態」に属する概念である。両者の差異は、端的に言えばその「何か」に表れるだろう。すなわち「犯罪」が「法」という限定的な規則から逸れたものであるのに対し、「非行」は少年犯罪ばかりか、虞犯、校則違反等に至るまで非常に適用範囲が広い。そしてそれらに底通している「何か」とは、ひとこと言えば社会的通念としての「少年」や「子ども」であるだろう。つまり「非行」は、「子ども」にとってあるまじき行為・状態に適用される概念であるといえる。

読者はこれを「あたりまえのこと」と思うかもしれない。だが非行・逸脱研究において、このことはきわめて重要な論点であるように思われる。それは端的に言えば、それらの概念が適用される

行為や状態を所与として考えるのか（実体論）、その概念を適用する私たちの活動ないし文化的規範に着目するか（関係論）という二つの立場の存在である。とりわけ前者に属する原因論的思考は、日常生活を営む私たちにとってもっとも親和的な思考法であるだろう。それは端的に言えば、ある少年がなぜ「犯罪」や「非行」に至ったかという問いに、いつか明快な「答え」を提供してくれるに違いない（そうでなければならぬ）という期待であり要求である。しかしこの思考法に対し、北澤氏は毅然とした態度表明を行っている。すなわち、原因論的思考による統計的特質はシステム上有効ではあっても、個人に還元できるものではなく、上記の「なぜ」という問いに科学は答えることができない（個人の行為の原因を問うことは原理的に不可能である）と。本書の特徴・意義を述べるならば、この態度にこそ集約されているといえるだろう。

本書は、学部学生・大学院生、現場教員を主たる読者として想定している。そしてこの「態度」に期待を裏切られる読者は少なくないかもしれない。しかしそれは同時に、教育という営為の探求への新たな一歩となることを紹介者は信じて疑わない。本書に収められた20の論文は、十分にそれに応えてくれるものであるからだ。

なお本書の構成は以下の四部よりなる。【第Ⅰ部「非行理論の諸相—基礎理論の展開」】では非行・逸脱理論の基礎的な理解とその応用可能性を提示してくれている。【第Ⅱ部「非行〈事実〉の社会的構成—公式統計とマスメディア報道」】では、私たちがメディアなどで見聞きする「社会的〈事実〉」としての「非行・少年犯罪」が、特定の文化的規範のもとに構成されたものであることが丹念に検証されている。【第Ⅲ部「学校文化と逸脱」】は、日常的な空間でありながら多様な「子どもの逸脱」の生じる「学校文化」のダイナミズムを読み解く刺激的なセクションとなっている。【第Ⅳ部「少年法と処遇の現在」】は、今日の少年法の保護主義的理念を理解するとともに、少年の更生に対する個人内在的な問題解決以外のアプローチへの展望を読者に示してくれるだろう。